

平成22年3月期 第3四半期決算について

ANAグループでは、本日1月29日(金)、平成22年3月期 第3四半期決算を取りまとめました。詳細は別添の「第3四半期決算短信」をご参照ください。

1. 平成22年3月期 第3四半期の連結業績

(1) 連結経営成績

概況

- ・ 継続する景気低迷の影響により、旅客需要の回復には想定以上に時間を要しております。
- ・ 一方で、国内外での景気対策の効果もあり、アジアを中心に輸出・生産・個人消費などに一部持ち直しの兆しが見られます。
- ・ こうした環境下、各種プレジャー需要の取り込み、需要動向に応じた機動的な機材変更を行い、収益性の改善に努めました。
- ・ 費用面では、「2009年度経営計画」、「09年度緊急収支改善策」を予定通り遂行し、徹底したコスト削減に努めました。

各種増収、コスト削減施策に努めましたが、需要低迷、単価の下落を補うことには至らず、当期の連結経営成績は、営業損失が378億円、経常損失は576億円、四半期純損失は351億円となりました。

単位：億円(前年同期比を除き、単位未満は切り捨て)

【連結経営成績】	平成22年3月期 第3四半期累計期間	平成21年3月期 第3四半期累計期間	増減	前年 同期比(%)
営業収入	9,237	11,074	▲1,836	83.4
営業費用	9,615	10,670	▲1,055	90.1
営業損益	▲378	403	▲781	——
営業外損益	▲198	▲175	▲22	——
経常損益	▲576	227	▲803	——
特別損益	▲3	▲32	28	——
四半期純利益または純損失	▲351	94	▲446	——

単位：億円(前年同期比を除き、単位未満は切り捨て)

【セグメント情報】	平成22年3月期 第3四半期累計期間		平成21年3月期 第3四半期累計期間		増減	
	売上高	営業利益	売上高	営業利益	売上高	営業利益
航空運送事業	8,163	▲399	9,782	376	▲1,618	▲776
旅行事業	1,269	▲2	1,480	3	▲211	▲5
その他の事業	1,033	21	1,130	23	▲97	▲1

連結子会社72社 持分法適用非連結子会社5社 持分法適用関連会社19社

国内線旅客事業

- ・ 景気後退などの理由による総需要の伸び悩み、新型インフルエンザの影響による企業の出張制限やキャンセルなど、非常に厳しい環境におかれました。
- ・ 新運賃「スーパー旅割」、「シニア空割」の設定、乗継運賃の拡充、地域と連携した観光振興キャンペーンや北海道、沖縄キャンペーンなど、需要の取り込みに努めました。

各種営業努力を展開しましたが、結果として旅客数、旅客単価ともに前年実績を下回り、売上高は前年同期実績を下回りました。

(前年同期比を除き、単位未満は切り捨て)

【国内線旅客事業】	平成22年3月期 第3四半期累計期間	平成21年3月期 第3四半期累計期間	増減	前年 同期比(%)
売上高(億円)	4,805	5,494	▲ 688	87.5
旅客数(千人)	30,190	33,226	▲ 3,035	90.9
座席キ口(百万座席キ口)	43,589	45,243	▲ 1,654	96.3
旅客キ口(百万人キ口)	26,759	29,153	▲ 2,394	91.8
利用率(%)	61.4	64.4	▲ 3.0	——

国際線旅客事業

- ・ 上期は景気低迷に加え、新型インフルエンザの影響による海外渡航自粛など、旅客数が低迷しました。下期以降はプレジャー需要を中心に旅客需要は回復しましたが、単価は回復しておらず、引き続き厳しい環境となりました。
- ・ 価格競争力の高い「スーパービジ割28」、「スーパーエコ割」の設定や、多客期におけるチャーター便、臨時便の設定など、ビジネス需要が低迷する中でもプレジャー需要の取り込みを強化しました。

以上の結果、旅客数は前年実績を上回りましたが、単価は引き続き前年実績を下回り、売上高は前年同期実績を下回りました。

(前年同期比を除き、単位未満は切り捨て)

【国際線旅客事業】	平成22年3月期 第3四半期累計期間	平成21年3月期 第3四半期累計期間	増減	前年 同期比(%)
売上高(億円)	1,565	2,393	▲ 827	65.4
旅客数(千人)	3,411	3,404	7	100.2
座席キ口(百万座席キ口)	20,131	21,254	▲ 1,122	94.7
旅客キ口(百万人キ口)	15,016	14,992	24	100.2
利用率(%)	74.6	70.5	4.1	—

貨物事業

- ・ 国内線は、沖縄発着便を中心に宅配貨物需要は堅調に推移しましたが、一般混載貨物の需要が低調に推移したことなどにより、輸送重量は前年実績を下回りました。
- ・ 国際線は、景気後退により需要は伸び悩んでいましたが、中国の内需刺激策を受け、中国路線を中心に荷動きが回復しました。
- ・ また、10月には沖縄 那覇空港を拠点として、深夜時間帯に日本3地点とアジア5地点を接続する「沖縄ハブネットワーク」を開始し、成長するアジア域内の需要の取り込みを図りました。
- ・ 単価は回復基調にあります。前年度を下回る水準で推移しました。

以上の結果、国内線、国際線ともに売上高は前年同期実績を下回りました。

(前年同期比を除き、単位未満は切り捨て)

【貨物事業】		平成22年3月期 第3四半期累計期間	平成21年3月期 第3四半期累計期間	増減	前年 同期比(%)
国内線	売上高(億円)	244	255	▲ 11	95.4
	輸送重量(千トン)	352	366	▲ 13	96.3
	有償貨物トンキロ(百万トンキロ)	348	356	▲ 7	97.8
国際線	売上高(億円)	390	592	▲ 202	65.9
	輸送重量(千トン)	303	285	18	106.4
	輸送量(百万トンキロ)	1,267	1,323	▲ 55	95.8

(2) 連結財政状態

- ・ 資産の部では、公募増資や借入による資金調達の結果、手元資金が増加するとともに、航空機の投資により固定資産が増加しました。
- ・ 有利子負債は、新規の借入により502億円増加しました。
- ・ 自己資本は、公募増資を行ったことなどから1,640億円増加の4,859億円、自己資本比率は25.6%、D/Eレシオは2.0倍となりました。

(単位未満は切り捨て)

【連結財政状態】	平成22年3月期 第3四半期	平成21年3月期	増減
総資産(億円)	18,960	17,610	1,350
自己資本(億円) (注1)	4,859	3,218	1,640
自己資本比率(%)	25.6	18.3	7.3
有利子負債残高(億円) (注2)	9,475	8,972	502
D/Eレシオ(倍) (注3)	2.0	2.8	▲ 0.8

注1: 自己資本は純資産合計から少数株主持分を控除しています。

注2: 有利子負債残高にはオフバランスリース負債は含みません。

注3: D/Eレシオ = 有利子負債残高 ÷ 自己資本

(3) 連結キャッシュ・フローなどの状況

- ・ 営業キャッシュ・フロー は、税金等調整前四半期純損失に減価償却費や税金の支払いなどの調整の結果、830億円の収入となりました。
- ・ 投資キャッシュ・フロー は、航空機関連の投資を行った結果、3,040億円の支出となりました。この結果、フリーキャッシュ・フローは2,209億円の支出となりました。
- ・ 財務キャッシュ・フロー は、借入金の返済を進める一方、新規の借入や新株発行により資金調達を行った結果、1,823億円の収入となりました。

単位: 億円(億円未満は切り捨て)

【連結キャッシュ・フローなど】	平成22年3月期 第3四半期累計期間	平成21年3月期 第3四半期累計期間
営業活動によるキャッシュ・フロー	830	▲ 14
投資活動によるキャッシュ・フロー	▲ 3,040	▲ 882
財務活動によるキャッシュ・フロー	1,823	568
現金および現金同等物期末残高(注1)	1,046	1,468
減価償却費	842	835

注1: 満期3カ月超の定期預金、譲渡性預金を含めた手元資金残高は2,292億円となります。

2. 通期の見通し

連結業績予想については、依然厳しい環境にあり、現在の航空市場環境は混沌としておりますが、こうした状況の下、国内線旅客については需要の低迷が底打ちした傾向が見られ、国際線旅客についてはプレジャー需要に続きビジネス需要についても回復が見られてきております。当社といたしましては引き続き収支改善に努めることにより達成を目指す所存です。したがって、連結業績予想の見直しは現時点では行いません。

単位: 億円(単位未満は切り捨て)

【平成22年3月期見通し】	予想 (10月30日発表)	前年実績 (平成21年3月期)	増減
営業収入	12,600	13,925	▲ 1,325
営業利益	▲ 200	75	▲ 275
経常利益	▲ 450	0	▲ 450
当期純利益	▲ 280	▲ 42	▲ 237

以上